

千原台高校改革に関する意見交換会について

1 日時及び参加者

日 時：令和4年（2022年）3月11日（金）15時40分から

場 所：千原台高校1階会議室（第一部）、ビジュアルルーム（第二部）

参加者：生徒、教職員、同窓会

遠藤教育長、小屋松教育委員、西山教育委員、苫野教育委員

事務局：松島教育次長、松永学校改革推進課長 他

	第一部	第二部	備考
生徒	7人	—	普通科健康スポーツ2人、国際経済2人 情報科OA会計2人、経営情報1人（うち生徒会4人）
教職員	—	5人	校長、商業科1人、体育科1人、その他教員2人
同窓会	—	1人	同窓会会長
教育委員	4人	4人	教育長、小屋松委員、西山委員、苫野委員
合計	11人	10人	

※第二部出席予定のPTA代表は欠席

2 意見交換会の内容

〔第一部 生徒の部〕会場：1階会議室

- (1) 開会
- (2) 生徒発表（千原台高校の取り組みや課題について）
- (3) 意見交換
- (4) 感想
- (5) 閉会

〔第二部 教職員、保護者、同窓会の部〕会場：体育館1階ビジュアルルーム

- (1) 開会
- (2) 千原台高校提案（クラス編制見直し案等について）
- (3) 意見交換
- (4) 閉会

※各部の意見は2ページ以降に記載

第一部 生徒の部（生徒発表の内容）

意見交換会第一部の冒頭に、生徒から千原台高校の取り組みや課題について発表がなされた。

1. 千原台高校の良いところ

- ・先生と生徒の距離が近く、質問や会話がしやすい
- ・ボランティアに生徒が多数参加（城西小学校のあいさつ運動など）
- ・部活動が盛んで、陸上部や自転車競技部、ハンドボール部等が好成績を残している
- ・国際経済コースでは、留学制度や中国語を学ぶことができる
- ・情報系のコースで、大学推薦や就職で有利となる資格を取ることができる
- ・施設が新しく、校舎がきれい

2. 千原台高校の改善できるところ

- ・登下校のマナーが悪い
 - ・授業を真面目に聞いている生徒が少ない
- 授業に集中すること、授業中に居眠りしないことが課題
- 改善策 朝読書を実施する→朝に本を読むことで脳を目覚めさせる
後の授業に集中できる！

3. 生徒主体の学校づくり

- ・全校生徒に向けて学校改革アンケートの実施
- ・校則見直しや学校改革に生徒が参加する
- ・新しい施設の考案（売店）
- ・千原台だよりの構成制作
- ・意見箱の設置
- ・体育大会や文化祭など、学校行事に企画から生徒が参加する

4. 探究的な学び

探究的な学び	成果
<ul style="list-style-type: none">・熊本市のCM作成・千原桜を観光的資源に・SDGsの取り組み・リサイクル資源でハンカチ作成・LGBTQ講演 など	<ul style="list-style-type: none">・色々な物事に興味関心を持てるようになった・話し合いや活動など生徒が主体的に行うための思考力・洞察力・様々な活動を通してそれを解決する方法や順序を事前に考える計画力・先生に助言を受けながら生徒が自ら案を提案し行動することができた！

第一部 生徒の部

(教育長) はい、ありがとうございます。今、プレゼンテーションしていただいて、課題とかいうところとか、非常にうまく示していただいたなと思います。何か補足というか、今、話さなかった方で、追加で言いたいことがあればどうぞお願いします。

(生徒) 自分たちの健康スポーツコースでは、クラスメートのほとんどが部活動に所属していて、みんな全国大会目指してやっていて、切磋琢磨して毎日生活出来てるなと感じております。

(生徒) その反面、授業中の態度が集中出来ていなかったり、やっぱり疲れて寝てしまったりしている人も多いので、そこを改善していければいいなと思います。

(生徒) 私は国際経済コースに所属していて、国際経済コースは今まではコロナ前までは留学制度があったので、それで国際交流が身近に出来ていたのがとても国際経済コースの強みだと思います。

(教育長) ありがとうございます。コロナで本当に今、すごくつらい思いをされてるところなんですけど、早くいけるようになるといいなあとと思います。今の発表もご覧いただいて教育委員さんから、質問とかコメントとかあればお願いしたいと思いますけども、どうぞ。

(西山委員) 生徒さんにお尋ねいたします。先ほど健康スポーツコースの皆さんは部活動を一生懸命やっていて、全国目指しているとおっしゃいましたけど、ここを卒業した後の進路はどういうふうに皆さん考えてらっしゃいますか。将来何になりたいと思っていच्छいますか。

(生徒) 公務員になりたいっていう人もいれば、スポーツ、やっているスポーツを生かして、私立の大学でもまず高みを目指していきたいという人もいますし、スポーツで経験したことを生かして理学療法士であったりとか、人を助ける仕事に就きたいという人もいます。

(西山委員) ありがとうございます。

(小屋松委員) 皆様の現役で今ここにいらच्छやって、その学校を改革しようということとか、なんとなく今をベースにして考えざるを得ないところあると思うんですね。でも、1・2年生皆さん卒業して、もうOBになっていくわけですよ。OBになったときに、例えばこう振り返ったときに千原台高校というのは、何か、母校はこういう学校だったらいいなとか、こういう学校だったら誇らしいなとか。ちょっと難しい質問かもしれませんが、また、ちょっとそこまで少しこう飛んでもらって、それから振り返って千原台見たときに、何かこう、そういう、こうあってほしいなという姿ってのは何かありますか、イメージとか。皆さんにお聞きします。

(生徒) 私は高校の商業発表会に参加して熊商さんの発表を聞いて思ったんですけど、熊商さんの生徒さんがこれをしたって言ったら、OBの人が助けてくれるんですよ。ホテルに所属している人がいたら、じゃあホテルでこういうお弁当を作りたいからちょっと案がありませんかとかいう。OBの人がちゃんと関わって行って、それがちゃんと広がっていける千原台高校のもう全体の何て言いますか繋がりが出来ていくといいなあとと思っています。

(小屋松委員) 良かったら皆さんに聞きたいんですけど、はい。

(生徒) OBになって、新聞とかで自分の後輩たちが来年例えば、難しい国家試験を合格したとかオリンピックに出ただとか、いろんな面で活躍してくれると自分の母校を言えば誇らしいなと思います。

(生徒) 千原台はたくさん資格を取得できるんですけど、それを生かして情報科とかだったら、IT

のほうに進んでそこの仕事場のほうで活躍してもらって学んだことを仕事場で将来生かしてほしいなあっていう。そういう誇らしいなあってことを将来生かせるように、そういう今のうちに勉強してほしいなと思います。以上です。

(小屋松委員) どうぞ。

(生徒) はい。私はスポーツをしてるので野球をしているので、甲子園とかで千原台高校っていう名前が見えたら誇らしいなと思います。

(小屋松委員) まだいってないですかね。

(生徒) まだ、一度もいってないです。

(生徒) 私も陸上部で、全国大会とかも出場させてもらってるんですけど、そこでも本当、上を目指して入賞が出来たら、さらに千原台のことを知ってもらえるとと思いますし、自分の誇りを持てると思います。

(生徒) 私は今、国際経済コースなんで、卒業後に千原台高校に訪問して、英語を教えたりとか、国際的に何か動けたらいいなと思います。

(生徒) 私も国際経済コースに所属しているので、国際経済コースの強みの英語を生かして、日本だけでなく、海外にもっと行く人が増えて海外で仕事を出来たり、留学とかももっと日本からでいろいろな考え方をして、それを身に付けた人たちがまた日本に帰ってきたときに、いろいろな考え方、日本以外の考え方をできる人が伝えられる人が、またこの千原台高校にいたらそれでいいなと思います。

(小屋松委員) いいですか。あの多分皆さんが将来こうなりたいなという感じの、お話が多かったような気がするんですけど。そうなるために、今じゃあこの千原台に足りないこと、ここはちょっとこうあってほしいな、だったら私たちは将来こういうことも実現できるかもしれないとか何かそういったことってあります。今学校にこう。

(生徒) さっきもあのプレゼンで言ったんですけど、やっぱり授業中、集中が出来なくてそれがやっぱり、学生の温度や勉強に支障が出て、そしてやっぱり資格取得が取れなくて、後から響いているので、今足りないのは、やっぱり授業を望む態度だなあとと思います。

(生徒) 今、言ってくれたことに付け加えて、休み時間の過ごし方だったり、そのものが休み時間の過ごし方のそのまま、授業に入っている感じがするので、もし、もうちょっとメリハリがつければなとは思っています。

(小屋松委員) どうやったらメリハリつくでしょうか。

(生徒) メリハリつけるためには、授業に入るときの前に、授業入る前に休み時間などを使ってその授業の準備とか、前こんなことがあったよねみたいな確認事項をしっかりと、友達同士で確認し合うことが大事だと思います。

(生徒) ちょっと今の千原台に足りないと思うのは、やっぱりあの売店だなと思うんですよね。ここに入学してきて、売店がないことにびっくりしたんですよ。それで、何か高校っていうイメージはやっぱり中学校と違って売店があったりとかして、何か食堂まで行かないけど、売店で例えば日用品のペンだったりとか校章だったりとか、そういうのをいろいろ買えて、ジュースも買えてみたいな感じがちょっと想像してたんですけど、それがなくて、びっくりして、毎日お昼になった業者の方がお弁当を売りに来られるんですよね。だけど、そのお弁当の個数が、ちょっと少なくて毎日数十人はしょんぼりして帰るんです。買えなくて。だから、とてもありつけない可哀そうだなあとあって、早く何か変えたいなあとと思います。

(小屋松委員) あとなければ私の質問にさせていただきます。

(生徒) 今、やっぱり周りの地域の方ともコロナ禍で難しいとは思うんですけど、繋がりがなくて高校生が今何をしてるっていうのが、やっぱり立地的な問題もありますけど千原台高校っていうのも知らない人が多いかなっていう考えもあって。やっぱり今このSNSとかが発展してる時代に、もっと高校生発信で先生を通してじゃなくて、高校生が主体となってそういう情報も提供していけたらいいのかなって思います。

(小屋松委員) 先ほどの売店の話もそうだし、今の生徒さんの話もそうだけど、やっぱ生徒たちが主体的にっていうか、自分たちでこう発信していくっていうか、そういったことをやっていけば状況変わっていく可能性ってあるんじゃないでしょうかね。校長先生後ろで聞いてらっしゃいますか。何かそういう感じで自分たちがこう思ってるということをごんごんこう言えるっていうか学校に対して、そういった雰囲気ってないんですか。言いにくいんですか。

(校長) 正直にどうぞ。遠慮なく、本音で言ってください。

(生徒) はい、僕が生徒会長になって、いろいろな改革しようと思って校則だったりいろんなことを改革しようと思ったときに、やっぱりあの先生にいちいち言わないとかいちいち確認をとったりだとか、いろんな手段があって、もうとてもあのすぐに改善出来なかったんですよ。これ、やりたいんですけどって言ったらこれはちょっとあれだからと言って誤魔化されて、もみ消されたりとかあって、それでやっぱ厳しいところがあるなと思います。

(小屋松委員) ということは生徒会としては、まだ先生たちときちんと意見を交換し合うようなそういう環境にはないということですか。

(生徒) 一応交換はしてるんですけど、何か折り合いがついてない。

(教育長) あまり聞いてもらえない。

(西山委員) ちょっと今の件について。それは生徒会のやり方だと思うんですけど、生徒会長の個人的な意見だと思われると先生方はまあまあごまかしてしまうこともあると思うんですけど、これは生徒の総意ですっていうみたいな形に持っていくと、学校も動かざるを得ないと思うんですよ。先ほど生徒主体で学校づくりが出来ているかというアンケートの中で、出来ないという意見があったと。生徒の意見を集め中心的な機関をつくったほうがいいという意見がありましたけど、これはまさしく生徒会ですよ。だから、こういう意見が出るということは生徒会の機能がまだ生徒さんに浸透していない。はっきり言うと生徒会が機能していない、ちょっときつい言い方、そういうことになってしまいますね。そこを皆さんの意識を高めて、生徒会として意見を集約して学校に伝えると。こういう仕組みにしていけないとなかなか学校側も対応出来ない。

(教育長) はい。さっき、全校生徒にアンケートをですね、したりとか、やっぱり生徒会の役員だけになってる。全校生徒の意見をうまく集められて、それを届けられるような生徒会になればだいぶ違うかもしれないですよ。まだ多分、生徒の皆さんも、生徒会がそういう役割なんだっていう。思っていない方もいるかもしれないので、それは会長が頑張れば。

(生徒) 頑張ります。

(苫野委員) はい、皆さん今日ありがとうございます。お話を聞いていてたくさんお話しして答えていきたいことがあるので、まずは簡潔にちょっとだけ感想から言わせていただきたいんですけど、今日まず1年生の方が半分いらっしゃるのがすごく嬉しいなと、いいことだなと思います。もちろん2年生もなんですけど、これから学校づくりの主役になれる皆さんが参加し

てくださったのが本当にありがたいなと思ってます。お話をお聞きして、先生と生徒の関係がとていいんだなという感じられてもみ消されていることもあるかもしれないけど、でもいいんだなっていうのも伝わってきてうれしく思いました。生徒さんがおっしゃったOBネットワークをもっと活用したいってのはすごくいいアイデアだと思いましたね。今日もOBの方いらっしゃってますし、千原台ってOBにすごい支えられてると思うんですよね。もっともその力を貸していただくことってできると思うし、総合的な探究ですね。たくさんOBの人の力をどんどん活用してやっていけば、きっとももっとも可能性あるんだろうなということをもってすごくいいアイデアだと思いました。さっきのSNSでどんどん発信したいっていうのもすごいいいアイデアだと思うんで。生徒が学校の中心にあるっていうのも一つの在り方ですね。そのSNS発信、この世の中出来たらいいなあと思いました。お聞きしたいことは、その前にすいません、もう一つあの、校則の見直し等のことでもうちょっと、西山委員も言ってくださったんですが、ちょっとこう、ヒントとかなんですけど今、全国で校則の見直しとか、学校づくりのコントローラを生徒たちが持つっていう、そういう動きがかなり広がってるんですけど、うまくいった例は先生VS生徒にならないっていうことですね、これが1番大事。というのはもういろんな例を見ていて思いますので、先生も学校づくりの仲間、生徒も学校づくりの仲間だから、みんなで膝を突き合わせて、その要求をするとか敵対するじゃなくて、どうすればみんなにとって良い学校になるかっていうことを一緒に話し合う。そういう場を定期的に持ったり、していくとかなり効果があるというのが見えてきてるんですね。ちょうど経済産業省がSTEAMライブラリーっていうサイトを持ってるんですけど、そのSTEAMライブラリー、そのルールメイキングっていう、校則を生徒たちで作り直していったり、見直していったりするっていうそのヒント集みたいなのが、映像が幾つも今、出来てるので、そういうのも先生向け、生徒向けとかもあるので、そういうのを見てこういうやり方したら、もっとも生徒主体そして先生とともに、もっといい学校づくりできるかもしれないっていうヒントあるかもしれないわけです。STEAMライブラリー、ルールメイキングで調べたら出てきますのでよかったですね。すいません、長くなりましたが質問というか、ただ校則だけじゃないと思うんですよ。学校づくりの主役である、なるっていうのは。例えば文化祭とか体育祭とか、いろんな場面であるいは、学級運営もそうですよね、授業だってそうですよね。自分たちは、何かこう与えられてるっていうよりは、自分たちが学校づくりを手にしてるなって思える場面ってどれくらいあるか。ていうのを聞きたいと思うんですけど、いかがでしょうか。どなたからでもお聞きできればと思う。なかったらなかったですね。

(生徒) ないんじゃないですか。

(苫野委員) 行事とかどうですか。

(生徒) 体育祭が、私たち2年生が入学して1回だけあったんですけど、そのときは3年生の先輩方がずっとまわしてくださってるイメージがあったんで、そういうところでは生徒主体なのかなっていう感じる場面もあります。

(苫野委員) なるほど。ありがとうございます。

(生徒) 自分も体育祭関係ですけど、自分は健康スポーツコースでマスゲームをやるんですけど、そのリーダーしてて、そういうときはそのリーダーと2年生と1年生の健康スポーツコースのみんなで、その先生たちの進行とかじゃなくて自分たちで進行して、一つの演技を突き上げ

るっていうのが、生徒主体でやっていてそこはいいと思います。

(苫野委員) 部活とかどうですか。

(生徒) 部活動も自分は野球なんですけど、夏休みとかそういう期間は、自分キャプテンだったんですけど、自分中心に練習メニューを考えていくとかやりました。

(苫野委員) ありがとうございます。他、気になることとか。

(生徒) 僕はですね簿記会計部に入ってるんですけど、部長をしていて部員とみんなで今月は何日を休みしにしようとか言って、先生にあんまり言われなくても自分たちでやるようにはしています。活動を。

(苫野委員) なるほど、ありがとうございます。それなりに、ちょっと授業はまだって感じられるかもしれないけど、そういう場面もそれなりにあるって感じがある。という感じですか。そこをもっと広げていきたいなという感じありますか。

(生徒) はい。

(苫野委員) ありがとうございます。

(教育長) 私も質問したいんですけど、一番最初にこの千原台のいいところっていうことで、先生と生徒の距離が近いっていう一番最初出てきたんですけど、これはどんな場面で、そのなんでそう思われるのかなあと思ったので、それを聞きたかったんですけど、どんなもう少し詳しく、ということなんですかね。はい。

(生徒) 先生は授業中に、普通にみんなを通して教えてもらえるんですけど、休み時間になると先生からここ分るとか言って教えてもらったりとか、あと生徒も先生がおおらかで気さくなくて、生徒も、先生、先生教えてくださってやりやすくて、壁がないというか、簡単に言えばですね。何かそういう上下、上下の差っていうか、あんまり気難しくはない。先生と。

(教育長) 気難しくないけど、なかなか言うことは聞いてもらえない。

(生徒) そういう先生もいらっしゃる。

(教育長) わかりました。ほかの皆さん、どうぞ。

(生徒) 授業中以外でも、先生と生徒が日常的な会話とか相談事とかをしたりするときに距離が近いなと感じます。

(教育長) それは何でそういういい感じになっているんですか。何か先生がそういう努力をされてるんですか。それとも、生徒の皆さんが。

(生徒) 私が先生と授業外で、休み時間とかに話するときとか話しかけてもらったりとか、髪切ったねとか、そういうちょっとしたことに気づいてもらえる、気づいてくださることとか、自分も先生が髪切っている先生方いらっしゃったら、髪切ったんですねとか、何かそういうちょっとしたことでも言ったりできるので、それも少しあるのかなと思います。

(教育長) 人数がそんなに多くないからっていうこともありますね。もう一つはやっぱり課題として授業中の学習への意欲とか、そういうところがいうこと。でも皆さんがそう思っているんなら、授業ちゃんと聞いたほうがいいよって皆さん思ってるんだったらできそうなんですけど。それとも皆さんはそう思ってるんだけど、周りの人はそうじゃない。どうなんでしょう、ここにいる人たちはもう、選ばれた人たちだから授業は聞いてるけど周りのお友達もっと聞こうよってこういう感じ、それとも自分たちも含めてなかなかうまく出来てない感じかな。

(生徒) 自分たちも含めてまだちょっと出来ていないかなとは思っています。

(教育長) 授業をちゃんと聞かなきゃいけないと思ってるけどできない。

(生徒) ちょっと睡眠欲に負けて。

(教育長) どうやったら改善するんですかね。朝読書するっていう、改善策が一つありましたけど。それだけでいい、いけるのかな。何ていうんでしょうね。朝読書しても余計眠くなっちゃう。何が足りないんですかね。

(生徒) いいですか、僕の持論なんですけども、何だろう、生徒が寝てるとするじゃないですか。でもあんまり強く何だろう、揺さぶったりとか出来ないんですよ。

(教育長) まあそうですね。

(生徒) ただ、それが生徒を甘やかしてると思うんです。やっぱちょっと起こすにも、はい起きてとペンでチョンチョンとたたきただけでそれだから生徒は甘えてるんです先生に。僕の持論です。

(教育長) もっと叩き起こしてほしい。

(生徒) そうですね。

(教育長) それはなかなか難しいんですね。先生のほうも何かそういうやれることがあるんじゃないかということですよ。ただ、寝てるもっと強く叩き起こしてほしいというのはそれもそれでなんていうんですかね。そのときは起きるかもしれないけど、毎日それだと大変な気がしますけどね。ま、でも甘えてるっていう、寝てもいいよってみんな思っている。

(生徒) 僕のクラスだけの話ですと、友達同士で起こすんですよ。起きて起きてとか言って。でも、もう本気で寝る人は寝るんですよ。もう何か、そこはもうみんな割り切って割り切ってもうじゃあいいやっていう感じで、自分は自分みたいな感じが、ちょっと雰囲気がない感じ取れたんですよ。

(教育長) それはほかのクラスですと、そんな感じですか。

(生徒) 自分たちのクラスは部活動とかの疲れがあって、寝てる人は結構います。

(教育長) 部活で疲れちゃうから寝ちゃう。ちょっと、確かにね。わからなくはない。どうなんですよ。苫野先生どうやったら寝ないでしょうか。

(苫野委員) よろしいでしょうか。あの、皆さん言いにくいかもしれないんですけど、授業が減茶苦茶面白くてわくわくしたら、あんまり寝ないと思うんですよ。そこで、さっきの話なんですよ。そういった校則見直しだけでなく、授業も生徒が主役になってますかっていうのはそういう話だと思うんですよ。先生といや、授業っていうのは先生が生徒に与えるものじゃなくて一緒につくっていくもの。それが今、文科省もそういうふうにしていきましょねってやってることなのでそれやんなきゃ駄目ですよ。ということは皆さんが先生と一緒に相談して、こんな授業していったらもっと楽しくなるかもしれない。皆さんでつくっていく。そういうのがこれから多分必要になるんじゃないかなと思うんですよ。皆さんだったらできるんじゃないかなという感じがしてるんですけどもね。あるでしょうアイデアはね。先生ももうちょっとこうしてくれたら、もっと自分がもっと没頭出来ますとか。そういうのをそれこそ先生や生徒たち話し合っ、こんな授業もしていったらどうだろう。もっともっとこんな探究的要素も入れていったらどうだろうとか、そういったことってきっとできるんじゃないかなと思うんですよ。どうですか、出来そうですかそういうのって。いや、私が言ってることは間違ってるかもしれないので、それも含めて学校のことを考えられるかなと思うんですけど。

(生徒) 僕はこの情報科のOA会計コースのところなんですけど、その授業でビジネス実務というのがあって、それは様々なマナーだったり、席次だったりいろんなマナーを学べるんですけど、そこでフォークの使い方とかテーブルマナーも学ぶところがあるんですけど、そこで

紙媒体でこれはこう使うんだよって言われてもいまいち理解出来ない生徒も多かったんで、例えばホテルに行ったりとかあそこ行くとか、実習をやったらもう何か学べるんじゃないかなあと思います。

(苫野委員) そういうことをぜひ、一緒に話し合っ一緒に授業づくりもやって協働、協働創造っていうか、授業とはやっぱりそういうもんじゃないかなと思いますね。

(教育長) 単純な話ですけど、聞いているだけだったら眠くなりますよね、あたり前ですよね。それは大人もそうです。1時間、2時間ずっと研修で話聞いているだけだったら当然眠くなって。生徒と話す場、場面ていうか時間が多いならばそんなに眠くならないと思うんですよね。皆さん多分、体育の授業寝ないでしょう。ある程度動いているからね。やっぱり聞いているだけっていうのは運動した後に、話し聞いているだけだと当然眠くなる。その授業のスタイル、やり方を少し変えていくというのは、大事なこともかもしれないですよ。

(小屋松委員) ひとついいですか。先ほど生徒さんがおっしゃってたけど、熊本商業高校の話をされてOBの方々何かそこをフォローするという話がありましたけど、ここも、もともとは千原台という名前の前は熊本市立商業高等学校ですね。熊本市立高校から商業科が独立して出来たっていう。商業についてはかなりこう歴史のある学校なんですよ。だから、当然OBの方々も熊本で活躍してらっしゃる方はいっぱいいらっしゃるんですよ。僕も何人か知っていますけど。そういう人たちを呼んでそして話をする中で、またもう次の授業のとかあるいはこう先生方との話合いのいいヒントが得られるかもしれないから、そういった面ではもうせっかくだからOBをどんどん活用する。来ていただく。そういうことをやっていったらもっと何かこう具体的にいろんなことが自分たちで取り組もうという姿勢につながっていくんじゃないかなっていう気がするんですけどね。今までこうOBの方々を呼んでやってらっしゃるんですか。学校に呼んでとか、あるいは訪問していくとかね。

(生徒) ないですね。

(生徒) フィールドスタディをやったときは、訪問した企業さんのところに千原台高校出身なんですよっていう方がいらっしゃるとか、千原台に所属していてその企業さんがそのお話をしに来てくれたりとかはあったんですけど、直接その人に対してっていうのはなかったです。

(小屋松委員) 何かどこの高校だったけど、何かほらもう高校生で税理士試験を目指すとかね。そういったことがかなりのニーズの方やってらっしゃるとか。あるいは熊本商業高校もそうかもしれないけど、いろんな資格を高校時代に実は取っているとか。そういう方がいっぱいいらっしゃいますよね。何かそういった具体的なこう、目に見える目標とかそういったものは千原台の生徒さん方っていうのはどの程度持ってらっしゃるんですかね。例えば、うん、情報科とか。

(生徒) 情報科はですね、電卓や簿記1級は取れたりとか、商業経済検定だったりとか、情報処理の1級が取れたりします。

(小屋松委員) どれぐらいの数の方がとおって(合格して)らっしゃる。

(生徒) 一応3、4組あるんですけど全員受験なんですよ。で、大体、1級とかになると大体半分以上か、半分近くが取れたりします。

(小屋松委員) 資格はいろいろ取ってますよね。はい。

(西山委員) 今回の改革のですね一つの目標は、やはり、あの授業の質の向上だと思うんですよ。今、あの生徒さんが一生懸命、授業に集中出来てないという反省を述べておられたけど、生徒

さんも反省してもらわなきゃいけないけども、先生方にも頑張ってもらって面白い授業づくりをしていただくということが、大事なと私たちは思っているわけなんですね。その中の一つに先ほどお話があった探究的要素という授業の中に探究的要素を入れていただく、それによって興味関心を引き出していただくということですね。もちろん資格のための勉強がですねどうしても知識伝達型になりますから、そういう時間が多くなるのは仕方ないんですけど、探究型の要素を入れられる授業ではできるだけ入れていただいて、皆さんの興味をかき立てて、寝ている生徒が1人でも減るようにですね、そんな授業づくりを目指していただきたいというのが我々の改革プランのもう一つですね方向性でもあるわけなんですね。それを理解していただいて、皆さんも生徒さんは生徒さんなりに授業に集中してですね、頑張っていたできるようにしていただきたいなと思っています。

(教育長) 今日の意見交換会も皆さんすごい自分の意見をね、はっきり、積極的に言うじゃないですか。それは本来は皆さんそういう力を持つてるんだけど、それがあんまり先生方に伝わってないっていうか。今日もですね、実は先生たちがうちの生徒意見言えないですから、何にも意見出ないんじゃないかってそれを皆さん心配してるような感じがして。言い方を変えればそれは先生が生徒のことを理解してないのかもしれないけど、皆さんがちゃんと意見が自分の意見を持つてるし、言いたいし、言えるんだよってということが先生方に伝わってない。そういうところは多分あるんだろうなというふうに思うんですね。多分今日見てて、えーこんなにうちの生徒意見言えるのって思っている。先生が。ていうか私もそう聞いてたのと違うじゃないかということで、だからすごい安心したし心強いなと思っています。でも多分それをみんな、みんな先生方みんながそれをまだ理解出来てない。それが理解できればもうちょっと安心して生徒に任せてもいいかなって思ってもらえるんじゃないかと思うんですね。それだけのものを今日とても安心したし、すごい心強いなと思ったのと。あとはここに来てる生徒じゃなくてみんなそうなのかっていうところの不安はありますけど。でもやっぱりそういうものはちゃんと持っている。今日のこういう感じであれば、全く授業、学校、校則づくり、それから行事も含めてもっと安心して生徒に任せて、生徒主体でつくっていいんじゃないかなと思いましたが。そこは多分今日先生方もそういう認識を持っていたんじゃないのかなと。こういう場を場面をですね、テレビカメラの前で堂々と意見を言えるなんて多分思ってたんじゃないのかなと思うんで。先生方もちょっと生徒を信じてあげてもいいのかなっていうふうに今日は思いました。そろそろ時間なんですけど、他に何か、皆さん、これだけは言っておきたいとかあります。どうぞ。

(生徒) すいません。この改革によって国際経済コースがなくなるじゃないですか。それは何か何でスポーツとかの千原台のスポーツや英語や商業とかあるじゃないですか。その中で何でこの英語科を消して、あれ、何なんですか、全日制じゃなくて通信制にしたのかちょっと聞きたいなと思います。

(学校改革推進課長) 学校改革推進課長の松永でございます。検討の中では生徒の皆さんがどういったところに関心を持っていられるか、また、各コースの入試をどれだけの方がお受けになってらっしゃるかを考えました。そういった中で千原台高校の強みというのが、商業・情報と健康スポーツその二つだということ、それが特徴なのではないかという議論の中で整理をしたんです。ただ、国際経済で学んでいられることを全てなくするという発想では全くなくて、国際経済で学んでらっしゃる国際的な部分、そういったものは商業・情報でも健康ス

スポーツでも生かされると。今、残念ながらコロナ禍で出来ない状況ですが、国際経済がなくなった後も、留学については、商業・情報の生徒さんも健康スポーツの生徒さんもお興味を持たれる方は、是非チャレンジしてほしいというふうに思っています。というのが、今まで培われた千原台高校の伝統というのは、これは引き継がないと非常にもったいないので、なくすというよりは発展的に解消して、それぞれの科の中に溶け込ませてやっていくというような想いで私たちはおります。伝わりましたでしょうか。

(生徒) 分かりました。

(教育長) だから国際経済コース国際的なものをなくしていこうということではなくて、ほかのコースでも全体でやっていこうと留学もそうですけど、一つのコースだけじゃなくて学校全体にそれを広げていこうということです。コースという名前としてはなくなりますけど。学校全体で取り組んでいくというふうに思ってもらえるといいのかなと思います。あと、ちょっとその最近ですとコロナもあり非常に、海外とのやりとりが難しくなっていますけど。そのコースとかいう、これで1回決めたらそれでももうずっと決まりじゃなくて、また何年かごとに見直していくっていうことも出来ると思うので。それは状況見ながらよりよく改善していくっていうこと。今後ですね、別に国際的なものをなくそうというつもりでは全くない。それは安心していいかなと。

生徒代表感想

(生徒) 本日はですね、このような機会を設けていただきありがとうございました。今日出た意見をですね生徒会だけではなくですね、教室に持ち帰って素晴らしい千原台をつくっていこうと思います。今日はとっても建設的な意見交換会になりました。ありがとうございました。

教育委員代表感想

(教育長) 今日はどうもありがとうございました。とてもいい意見交換、まさに今、生徒さんから言っていたように、前向きな建設的な意見交換が出来たかなと思っています。こんなに本当に皆さん意見を積極的に言ってくれて。シナリオにはですね、もし意見が出なかったら議論が停滞したら早めに終了しますと書いてある。全然そんなことない。時間オーバーするぐらいで。もっと皆さん自信持って自分の意見を日頃の学校活動の中でも、積極的に言っていっていいんだよということです。思ってもらえればいいと思いますので。ぜひ、そうやって学校を、全体をですね盛り上げていくということが大事かと思しますので。ぜひ今後も、今日のような感じで、どんどん意見を言ってもらってここがいいとか、ここは変えたほうがいいとかいうことをですね遠慮なく言ってもらえれば大丈夫だと思いますね。それに先生もちゃんと耳を傾けるということを今日校長も聞いて約束してくれると思いますので、そういうことで今後もよろしく願います。今日は本当にありがとうございました。とてもいい意見交換になったと思います。ありがとうございました。

第二部 教職員、保護者、同窓会の部（千原台高校提案の内容）

意見交換会第二部の冒頭に、千原台高校南校長からスクールポリシー等他、以下の内容について提案がなされた。

1. スクール・ミッション

〈高校の理念〉

校訓「誠実」「創造」「友愛」のもと、熊本市立の情報ビジネス探究科と健康スポーツ探究科を有する高校として、

〈価値・パブリックイメージ：どのような生徒を育て社会的な期待に応えるか〉

多様な価値観や創造性を備え、情報・ビジネス・健康・スポーツに関する高い専門性を有し、熊本市のまちづくりを支える人材を育成します。

〈ねらい：どのような教育を目指すのか〉

そのため、社会や産業に関する理解を深め、地域の課題解決や活性化を生徒自ら探究的に学ぶことのできる教育を目指します。

また、全国レベルの部活動の競技力向上や各種の資格取得を進めることにより、社会での実践力を育むことを目指します。

〈特色・強み：魅力化、独自の教育、特色〉

今後は、熊本市、市立専門学校、大学、企業等と連携・協働し、PBL 学習（問題解決型学習）や科学的なトレーニング等の実践的・体験的学習を推進するほか、生徒が主体的に学校づくりに参画する機会の拡充に取り組みます。

2. スクール・ポリシー

〈グラデュエーション・ポリシー（育成を目指す資質・能力に関する方針）〉

情報・ビジネスに関する専門的な知識や資格の取得による社会での実践力を育成する
健康・スポーツに関する専門的な知識と社会の健康を支えるための資質を育成する
予測困難な時代を生き抜くための柔軟な思考力と行動力を育成する

〈カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成及び実施に関する方針）〉

基礎学力を身に付けるための必修科目に加えて、情報・ビジネスに関する専門性を高めるための学習に取り組む。（情報ビジネス探究科）

基礎学力を身に付けるための必修科目に加えて、健康・スポーツに関する学習に取り組む。（健康スポーツ探究科）

予測困難な時代を生き抜くための柔軟な思考や実践力を身に付けるために探究的な学びに力を入れて取り組む。

「一生懸命はカッコイイ！」のモットーのもと、生徒が全力で、主体的に学校づくりに参画することが出来る学校行事や部活動等の実践に取り組む。

〈アドミッション・ポリシー（入学者の受け入れに関する方針）〉

基礎的な学力の基盤の上に、情報・ビジネス・健康・スポーツに高い関心を有する人材の確保を目指す。

多様な価値観を育むことを念頭に、特定の分野に著しい能力を備える人材や多様性を有する人材の確保を目指す。

学校行事や部活動等に一生懸命に取り組むリーダーシップとフォロワーシップを有する人材の確保を目指す。

3. 改革を進めるうえでの課題・要望について

《情報ビジネス探究科》	《健康スポーツ探究科》
<ul style="list-style-type: none"> ・商業科教員の増員が可能なのか ・PC室、PC数を十分確保してほしい ・現特別教室棟にある各教室について、改築後も十分な広さを確保してほしい 	<ul style="list-style-type: none"> ・体育科教員を増員してほしい ・グラウンドの早期整備をお願いしたい ・健康スポーツ探究科と情報ビジネス探究科の生徒で、部活動の時間にズレがあるためトレーニングの効率が悪い

4. 課題克服のためのクラス編制見直しについて

3にある課題・要望を克服し、スクールポリシー等を確実に実践するために、以下のよう
にクラス編成を見直すことができないか。

	基本計画		学校提案	
	クラス数	1クラス(学年) あたりの生徒数	クラス数	1クラス(学年) あたりの生徒数
情報ビジネス 探究科	4	30	3	30
健康スポーツ 探究科	1	40	2	30
1学年合計	5	160	5	150

《メリット》

- ・現行の健康スポーツ探究科では、強化部やその他運動部における生徒の確保が困難であるが、学校提案では克服が可能
- ・探究的な学習を進めるうえで、少人数の方がよい
- ・情報ビジネス探究科でも、少数精鋭となることで、高度な資格取得を目指しやすい
- ・商業科、情報科の教員の確保が難しく、体育科の教員の方が確保の可能性が高い
- ・情報ビジネス探究科に充実した施設を提供しやすい

《デメリット》

- ・市立商業からの伝統が薄れる
- ・健康スポーツ探究科の定員を確保できるかという課題が出る可能性がある
- ・1学年あたりの生徒数が更に10人減となる

第二部 教職員、保護者、同窓会の部

(教育長) はい。私のほうで、進行していくことになりますのでお願いします。最初に、教育委員は紹介しましたので、よろしければ皆様、一言だけお名前と自己紹介をお願いします。

(校長) はい。千原台校長の南です。本日はどうぞよろしくをお願いします。

(池本) 千原台高校の情報科の学科長をしております、池本と申します。よろしくをお願いします。

(嘉古田) 体育科主任をさせていただいてます嘉古田です。本校、千原台高校OBになります。よろしくをお願いします。

(中村) 数学科の中村といたします。よろしくをお願いします。

(西村) 数学科主任と教務部副主任をしております、西村といたします。よろしくお願ひいたします。

(同窓会会長) 同窓会熊城会会長、戸田でございます。よろしくをお願いします。

(校長) 教育長、一言お断りを。あと御一方、清爽会の会長、清爽会と申しますのがPTAです。ところがどうしてもお仕事が抜けられないということで先ほどお電話がありまして急遽欠席ということでお知らせしておきます。

(教育長) わかりました。ありがとうございます。先ほど、校長のプレゼンテーションは、これ校長の私案ということは、まだ学校の案というわけではないんですね。

(校長) そうですね。一応職員には、話し、示しはしました。ただそれを、全体的にコンセンサスをとって、というところまではいきついていなくて、今、業績評価の面談をしておりますので、そこで一人一人の職員からこのことについてどう思っているかっていうことを聞き取っている段階です。

(教育長) はい、わかりました。今の校長の発表を受けて、教育委員さんから感想、質問、その他、あれば伺いたいんですけど。

(西山委員) クラス編成の変更案のところではやはり最大の問題というのは、商業科、情報科の教員の確保が難しいということなんですね。どの程度難しくてこういう案になっているのか、そこをもう少し説明していただけませんか。

(校長) はい。これは私の個人的な実感なんですけれども、例えば教育実習に来る卒業生の状況を見ましても、今年度の教育実習生、体育科だけしか来ませんでした。商業は一人も来ませんでした。昨年度は体育科が4人、商業は2人。その2人も、もう教員にはならない。就職が決まっている。結果的に、税理士を目指していた子がオファーがあったので私立にちょっとだけいきますというのは聞いています。なかなかやはり若手の先生方の、若手の新しい先生たちが入ってくる現状が今あまりない。現実問題としてすごくベテランの先生方に非常勤講師あたりお願いして、具体的には70代の先生にも、今だに非常勤、授業をしていただいている。という現状もあります。というところでそういう風な実感を持っています。

(西山委員) わかりました。本当に教員確保ができないのであれば、教育は維持できないのですから、ご提案のようなクラス編成というのも考えていかなければいけないのかなという風には思います。

(小屋松委員) 千原台の前身といいますか、市立高校から商業科が独立して市立商業高校ができたという、その経緯を見ますとやはりこの改革でなすべきことは、やはり千原台の特徴である商業科というのがあって、どんどんレベルアップあげていくようなそういう方向性での改革というのは私はあっていいのかなという風に思いました。それが具体的にどういう形で現してくのかというのは、まだちょっとこれからの成果もわかりませんから。基本的にはそういう考え方で改革をしていったらいいかなとちょっと思いました。

(苫野委員) 私としては、先生方に是非、教育委員会の案と校長先生の案と含めて率直に今どういう風にお考えなのか、お感じになっているのかを是非お聞かせでいただきたいと思っておりますので、そこでやり取りができればありがたいなと思っております。

(西 村) はい。話したいことはたくさんあるんですけども、時間が24分しかないというというのが非常にちょっと残念かなと思っております。予定では5時半終了、ほんとはもっと時間とっていただきたいかったというところがあります。今、学校長から出た意見についての意見ということだったんですけど、まずその前に、12月の教育委員会会議で学校長が、あと1年延ばして欲しいということ、教育委員さんとの話し合いの場を設けて欲しいということを提案されたときに、教育長の方から、やっぱり自分たちのところ、自分たちのことになって初めて改革が始まっている。今まで関心持ってなかったのに、自分のところに降りかかってくると急に、ああだ、こうだいい始める、というのがあって、言われてて、いやそうじゃないんだけどなというところがありましたので、ちょっとまずその経緯を話させていただきたいと思っております。まずは最初に、私たちのもとで出てきたのが、平成31年3月19日に千原台高校の入学者選抜における受検者数減少についてという職員会議が突然開かれました。教育委員会の方から、このままでは学校がなくなるかもしれない、だから改革の案をだせという話があります、というのが学校長からありました。で、こういうこととして欲しいとか教育委員会から上がってきたので来年度から取り組んでいきたいと思っておりますという話がありましたので、私の方から、学校としてどういう方向に改革していくとかそういう、まず方針ですね、学校としての方針が出ないことにはみんなどこに向かって走っていいかわからない。まず校長先生、6年度の頭に学校長として、どんな学校にしていきたいのかという方針を出して欲しいということをお願いしました。で学校長どんなこといわれるかなと思って4月の1日の職員会議楽しみにしてました。そしたら、結局、何も出てこなかったんですね。その時の学校長の表現が非常に衝撃的だったので私、思わずメモしているんですけど、いわれたのが、こんな学校にしたいといったところで今の校長にはそのような権限はない。任期も1年しかない。だから出しません。といわれたんです。だから、私たちどうしていいかわからない。学校長がどうせ私もうできないから。前校長です。そういうこといわれましたので、私たちとしてはどうすることもできず、その年から学校改革検討委員会が始まりましたので、ただ、ただ検討の、会議の議事録とか分かりますので、そういうのを見たりするぐらいでした。僕らの中では毎回の会議の意見を聞きながら、話はしてました。話すんですけど、何かいろんな意見がたくさん出て、これどうやってまとめるんだろうなという話をしてました。で、答申が出ました。当然僕は答申見たんですけど、まとまってないというのが正直な所です。あの場に出てきた意見、全部載せてある。そういう答申だったなあという印象を受け取りました。年度末にどうなっていくのかなと思っていたら、最初、教育委員会の方から案が出ました

のであとは学校の方でお願いします、みたいな話があったそうで。いやいや、いきなり全部任せたと学校に放られても困る。教育委員会の方で教育課程なりなんなりちゃんと出してくれというやり取りがあったそうで、初めて翌年度に教育委員会としての教育課程が出てきました。ところがびっくりしたのが、義務制の方々が作られていたので、信じられぬ教育課程が出てきたんですね。国語とか社会とか数学と書いてあるわけです。そんな訳ないですよ。国語も現代文とかそういう科目名が入らないと教育課程とはいわないので、そういうのが出てきてびっくりしたんですね。これでは、大変なことになる、ということで。教育課程を学校としての対案を出さないとまずい。ただ、本当はそれは変わられた学校長もしくは教頭先生、要は管理職の方で教育課程というのはリーダーシップもってやっていただきたかったことだったんですけども、中学校から来られたということで高校のことはよくわからない、ということでしたので、仕方がなく私の方で、教務副主任という立場で、各教科の先生方に話を聞いて回って、教育課程を作りました。ただ、私は数学科の主任でもあるので、そういうことすると結局、利害関係があるわけですね。教育課程を作ろうと思っても。ある科目を多くするとある科目を削らないといけない。その調整を一教科主任がするというのは、本当は難しいですね。結果どうなるかということ、私が身を引くしかないという、数学科の科目を減らすしかない。そういう調整の仕方、出すだけ出しました。教育委員会にいわれた通りに。そうしたら、また教育委員会としてはこうだみたいな学校側が出したのとまた全然違う案が降りて来ます。そういうやり取りがしばらく続いたので、これでは話にならないと、向こうの事務局の方を呼んで欲しいと、教科主任と話をする場を作って欲しいということで、その場を作って頂きました。ところが、こちらとしては、例えばプロフェッショナルを目指す。情報のプロフェッショナルだったら、今、数学ができないといけないというのは、当然の事実なんですね。AIだの何だの機械学習とか学ぶとか書いてありましたけど、あれやろうと思うなら高度な数学が必要なわけです。ところがカリキュラムは数学Iとか必須単位だけで抑えてくれといわれてたので、必須科目しか置いていない。これどういうことですかとかいうのを事務局の方に聞いたりとか、ここはこうならないのかという話をするんですけど、いやそれ上席がという、常に上席という単語が出てくる。それはちょっと許可が下りないと思います。だからその上席という人を連れてきて欲しいという話をしたところ。結局、こういう風に変えたいと思っておられる、どなたか知りませんが、その方が目の前におられないからいくら話をしても、いやそれは許可が下りないとかそういうやり取りにしかならない。そういうのがずっと続いて、ほかにも、ちょっといろいろ経緯がありましたけど、今の学校長からの提案があったのが、ついこの間の職員会議で提案があって、ここ変えられない、ここ変えられないといっていたところが大幅に変わった教育課程がドンといきなり出てきてわけですよ。僕らからするとびっくりする。いやそれダメっていったらどうって思うのが、今度、いきなり今でできたわけです。それから、学校長から提案があったクラス編成についてもいきなり、え、今、みたいなのが私たちの印象です。だってそんなの最初の方から分かりきっていたことで、だから、反対していたんですね。そんなに商業科をたくさん作ってしまうと、職員が絶対、足りないんじゃないかというのは大分前からいわれていたことなのに、12月の時点で学校長は聞かれたんですね嘉古田先生の方から、今の教育課程で学校長はいいと思うんですか。いや素晴らしい教育課程だと思う、といわれた直後に、

今出たやつがその時と大幅に違う。どういうことなのか分からない。やっぱり、一番ベースとなるビジョンというのが最初になかったからこういうことになってしまっているのではないかな。誰かが熱い思いを持ってこういう学校にしたいんだという、それで分かって欲しいということで下していくのであれば、色んなものがきちっとその筋でまとまっていたと思うんですね。だから、今、出たクラス編成の案は前回私も突然そんな案がでてきて、あれそんな、コース編成もクラス編成も替えられたんだということにびっくりして、意見が浮かばなかったんですけど、今、思っているのは、私のビジョンとしてはスクール・ミッションの中に入れていただきましたけど、熊本市のまちづくりですね、まちづくりに寄与する人材を育てるっていうのが、市立高校の一番のミッションだろうと思ってたので、その線からすると、まちづくりするのに、それをミッションとしているのだから、そのミッションから考えると、まちづくりに必要なコースが必要なわけで、それを考えたときにあんな風にコース編成が変えられるんだったら、僕は国際経済コースを1クラス残したい、健康スポーツコースで1クラス、国際経済コース1クラス、情報科を3クラスの方が良いのではないかと今では思っています。すいません。その意見をいうまでがちょっと長かったです。いろいろ思いがありまして。

(教育長) 最初にビジョンを決めたときに、ここにいる苫野委員が委員長として1年間議論をして、毎回情報を共有して、話を聞いてビジョンを決めていったんですよね。だから、その時私が言ったのも、その時になぜ何も言わないのか。最初にその話が一番大事ときには、もうこれでいいですよ、ということで進めていった。一步一步進めてきたつもりなんですよ。私たちは。だから、校長がいやもうあと1年で私は言わないといったのは私は知らないが、我々としては毎回校長が来てるし、それで目の前で話をしながら進めてきたので、後から言われてちょっと何なのというのは、それは本音です。そういう風に思いましたから。だから、いいんですよ。ビジョンを今から言っていた方がいいし、それに向けて進めていくというのは全然、構わないと思いますけど。でも、やっぱり最初に言って欲しかった。

(西 村) 当然、委員会があっている時にも学校長にはお話をしたんですけど、いや校長は参加するだけで意見はいえないからといわれてしまったんですよ。

(教育長) いやそんな事は無い。何のために参加しているんですか。会議の場で意見を言わなくて日々やりとりするわけだから。それは言って頂ける前提で聞いていただいているわけですから。そういうつもりでいましたけど。

(西 村) 一応、現場の意見を聞かないといけない、という風に荒瀬さんがいっていただいて、一回グループワークがあったと思うんですね。それにはもちろん参加させていただいて、そこで今いったまちづくりの話、私出したんですけど。そういう場ではちゃんと発言はしているんですけど。

(教育長) もちろんそれはそういう場面もありますけど、学校の意見としてやっぱり校長から言ってもらっている前提だと思っているので、あーこれで学校もいいんだと思って進めてたんです。

(西 村) だから結局、学校長を通しての委員会とのやりとりになっているので、学校長がそういうふうに通してもらっていない時はなかなか伝わらないですね。だから現場の意見を聞いてくれというのを働き方改革のところでですね、お会いしたときに伝えたことなんですけど

ど。なにしろうまく機能していればいくんでしょうけどそこでストップしてしまったときにどうしていいかわからなかった、というのが正直なところ。唐突に聞こえたかもしれませんが、学校内ではいろいろな意見をいったんですけど、そこでストップしてたっていうことです。

(中 村) 私はやはり教員が確保できないのであれば学校長の提案する意見というのは魅力的なところあるかなと思っています。個人的にその話を聞かせてもらった時、思ったんですけど、教員がいなければ子供たちが一番困るので、それは一番厳しいだろうなと思いますから、体育の先生方の確保がいいというのであれば、これがベストなのかって事は私はわかりません。2つを比べた段階でいうとその部分であるかなと思います。

(嘉古田) 体育科としての意見というところで述べさせていただきますが、先ほど2クラス案を出していただいたんですけど、やはり2クラスになるにしても1クラスの場合であったとしてもですね、今後スペシャリストを育てていくというところ出ましたよね、そういった特化していく部分が出てくるので、今よりさらに、だから先ほど課題の中にもあったんですけど、前期入試でやはり生徒を今よりも、今50%というところで40人の定員で20人の確保ができるんですね、そこのところを増やしていただいて70%以上、やはりそれぐらい増やしていただかないことには、今の課題である健康スポーツコース、体育科の所、以外に部活動の生徒がばらけて入っているんですね、商業科とかにですね。という事はどれだけ、スポーツⅠ・Ⅱという部活動としての活動の時間が素晴らしい活動の時間があるんですけど、そこで部活動として活動したとしても全員では行えないですよ、という事は結局、放課後にもう一度全員で練習をし直さなければいけない。効率が悪い。本当にスペシャリストを育てようと思うのであれば効率が大事だと思いますので、例えば午後からの5・6限目の時間ですね。全員で健康スポーツのところ体育科にいる子供たちが全部、部活動生で、そこでトレーニングできるというのがとても魅力的であるし、それが競技成績等につながってくると思います。それが一つです。それともう一つは先ほどから出てます教員数の確保というところで、万が一もし2クラスになった場合は担任が6人必要になってきます。今はまだ1クラスしかないので1組なんですけど3人で、副担任の先生方にも入っていただいている。副担任の先生方は体育以外の教科の方々も入っていただいているんですけど、もし2クラスになる場合は6名そして教諭の先生が必要となってくると思います。何故かというとならやっぱり今もそうなんですけど、体育科としてこちらにもプライドがありますし、体育科で選んで入ってくれたことで入ってきてくれた子供たちをちゃんと育てて、その後の進路実現に向けて送り出してあげるといところが本当に責任だと思っています。なので、そこには責任ある先生たちを配置していただきたいし、それが今後の体育科としての1つの大きい千原台高校の武器になると思うんですよね。千原台に来たら、体育で、スポーツで世界に通用する人が育ちます。千原台に来たら商業ですごい検定とか取って日本一になれる人が出てきます。その2つを大きく、打ち出していきたいって思ってますので、今いった教員数の確保、前期での合格者の割合の増加というのが、やはり約束していただきたいんです。そこができないと厳しいと思います。正直、これは。僕らはこの案を、はいという風には受け入れられません。そこは実際、やるのは僕らなので、僕らが生徒たちと接してやるので。そこでできませんでした。改革してできませんでした。じゃあ誰が責任を取るのかって、僕らになってくるんですよね。そこでとっていただけるならばいいのかもしれないですけど。でもやるのはやっぱり僕らで

すので、今後も今日こうやって意見を初めて聞いていただくじゃないですか、直接ですね。僕らの意見を聞いていただきたいなと思ってます。お願いします。

(教育長)今おっしゃっているのはみんなで部活が同じスケジュールでできる。つまり、健康スポーツだけで部活動を構成する。そういうことですか。

(嘉古田)やるのが一番効率が良い。もう一度、商業6限目が終わった後にもう一度部活をしなくちゃいけなくなる。特に個人競技とかだったらまだやり方があると思うんですけど、団体競技の場合にはそういうところが大事になってくる。

(教育長)じゃあ健康スポーツだけで部活動を構成する部とそうでない部2つできる。

(嘉古田)そうですね。もし、そうですね、今後そうやってほんとにスペシャリストを育てていくとなる場合にははっきりしたほうがいいと思います。

(池 本)商業科の主任をしています池本です。私は商業の職員なんですけども、確かに商業の免許をお持ちで受験をされるような先生というのは減ってきてるんじゃないかなあっていうのは思います。私は初任は神奈川県で熊本の方で採用がなかった時期がありましたので、他県の方を受験してそこで合格を頂いたので、神奈川のほうにいきました。今から7年前です熊本県の方で採用がありましたので受験をし直して戻ってきました。その時のおそらく受験者が40人位でした。実質、実受験者は38名いたんですけども、そのくらいでした。私がかもともと熊本県出身なので大学生の頃には受験してた時には80名ぐらい受けていたと思います。で、1人、2人の採用だったような時代、私が大学のときにはですね。で、今7年前、熊本県を受けた時が40名位でした。で、私、熊本県で採用して7年前帰ってきたんですけど、やっぱりここでしたいなと、教鞭取りたいなと思って、ここを希望したんですけども、ちょうど政令指定都市と熊本県の採用交流というかそういったところの境目だったみたいで、県から市へのスライドがちょっとできないみたい。また熊本市を受け直しました。その時は受験者が20名位だったと思います、確か記憶してる。だから7年前は県の受験者は40名位。私4年前にこちら戻ってきましたので、その時が20名位、熊本市を受験された方が、確かそのくらいだったと思います。県立はわかりませんが。だから年々なんていうんですかね、受ける先生方は少なくなっていると思いますけど。一昨年採用を市の方もされてると思いますけど大体何名だった位だったんですかね。10名位ですかね。ちょっとわからないんですけど、まあ減ってきてるんじゃないかなと思いますけれども。ただ免許をお持ちで教鞭とらわれている商業の先生方講師ですね、まだまだたくさんおられるだろうし、採用があると受けられる方はまだまだたくさんおられるかなという風に思います。ただやっぱり非常勤とかの先生をお探しするということは、少しやっぱり厳しいのかなと、これは県立、市立問わずなんですけど。政令指定都市と熊本県との採用の別れたのは1つ。私のようにですね、県にいながら市にいきたいなと思ってもらえないっていうようなところ。まあ要は受け直さなければいけないといわれたので、まあその辺の私にはわからないんですけど、人事権の市と県のそういったものもあるんでしょうけど、その辺が流動的にもっといけば人材確保とか講師の件も含め、もう少し何かならないかなあと思っているところもあります。定員の方なんですけど、子供の数が年々減ってきているということは重々承知で、商業が今120名定員から90名定員に、この案としてはあるんですけど。先のことを考えれば致し方ないのかなと。少し私もOBなので残念な気持ちはありますけれども、時代の流れに伴って、寂しいんですけど仕方がないかなというような気持ちはあります。ただ、その中身が

健康スポーツコースが2クラスで案として出されていますので、やっぱりここが少し心配しているところで、現に体育コースを置いている県立の学校さんも定員を満たしていない学校がほとんどですし、健康スポーツコースの受験者が今年前期後期で合わせて57だったかと思うんですけど、60をこれから確保していかなければいけない。ちょっと少し大きな賭けみたいところがあって心配してます。OBとしては学校の存続というのが危ぶまれるというのが一番心配で、改革して良いほうに運んでいけばいいんですけども、改革したことによって、定員割れがまた続いて学校の存続が問われてくるとちょっとOBとしても嫌だなと正直率直に思います。今、小学校中学校が社会体育化してて、この流れはおそらく先を見れば高校にもこの流れは来るのではないかなと個人的には思うんですけど、その中で60名定員の確保というのをどのようにやっていくのかなと。先ほど西村先生の方からも国際コースの30人がそのままの国際コースに残ってですね、そういったものもまあ確かにいいのかなとは思いますが、中学生の確保というところでそこだけが心配だなと思っています。現在40名定員で商業科の方にも強化部というのかスポーツをやっている生徒もおりますけど、そこには前期の枠40名の50%なので20名で確保がなかなか難しいので、より競技ですね、前期で取れるようにと情報科の方にも来てますけれども、まあそれでもいいのかなと思いますけども。入試の事は難しいと思っています。すいません。あまりまとまりないですけども以上です。

(教育長)ありがとうございます。商業の教員を志望したっていうか減っている原因ってあるんですか。

(池 本)何でしょうね。採用がコンスタントにないないっていうのがあるのかなと思います。普通科目に比べて商業の専門は、県と市においても毎年あるというようなことではないですよ。採用がない期間が長く続くと、他県に私のよういきますし、民間で働く方もおられますし、やっぱり生活がありますので。そういったところで減っていったのかなあというふうに思いますし、また、もう一つは免許更新制度が見直されますけども、更新されない方も私の知り合いにもおられますし、コンスタントに採用があるという事は目指す人には1つ希望があるのかなと思いますけれども理由は分かりません。

(教育長)分りました。

(苫野委員)ご意見ありがとうございました。私も改革検討委員会をさせていただいて、その時にですね、ずっと話をしていたのがとにかく現場の声をしっかり聞きましょう、先生方の話を聞きましょう、生徒の声を聞きましょう、委員の中にも生徒の方がいらっしゃるのみんなで考えていきましょう、たっぴり対話の時間を持ちましょうという事はずっとやってたんですけども、西村先生の話を持ってコミュニケーションのデザインに難があったなあというのをですね、痛感させていただきました。ここはしっかり見直して、もっとコミュニケーションを密にしていく必要があるかなというふうに思ったところです。私たちが当時ですね、具体的なところはですね、また答申出した後に詰めていこうってことだったんですけど、大きく合意したところが基本理念ですよ、自ら考え主体的に行動できる、これ、おそらく誰でも納得するものになってるんじゃないかと思うんですね。そして3つの特色ということで、市立ならではということと、探究的な学びを推進するということと、生徒が主体的に学校づくりに参画するというのも、この改革に関しての大きな方針として、おそらく皆が納得するものとして、その場にいた委員や現場の先生方・生徒たち、とにかくたくさんそういう

場を持ちましょうということを申し上げていて、関係者のコミュニケーションをしてそのあたりはしっかり合意できたと思うんですよ。つまりビジョン、先ほど西村先生ビジョンがはっきり明瞭ではないんじゃないかとおっしゃっていて、ただこの理念や方針に関しては、おそらくもっと共有する必要があると思うんですけど、本当にこれでいいのかという、いつでも考え直す機会が必要だと思うんですけど、一旦まあここまでは合意可能だと、後は具体的な案も答申で出しましたけどもしっかりと案をやりとりをしながらしっかりカリキュラムだったりとかコースだったりとかは考えていきましょうねということだったんですが、多分ここでコミュニケーションエラーが起こったんだろうなというような感じを受けています。なので、今からでもそこはやり直せると思いますし、もっともっと密にして先生方の意見をお聞きしながら、現実的な制約がありますよね、先生の確保だったりとか部活のあり方だったりとか、こういうことを踏まえながら、しかし、この検討委員会のアドバイザーをしていただいた麴町中学校の元校長の工藤さんの言葉を借りると、最上位目標をしっかりと合意すればそれを実現するために何ができるかをみんなで考えていけるはずなので、そのプロセスに先生方、生徒さんもう1辺、膝突き合わせてやる必要があるのかなということをおもいました。我々が先ほどおっしゃっていただいたように専門的な教科のカリキュラムの作り方はさすがにわからないので、そういうところは先生方としっかりと考えていかないといけないので。ただ何のためにやるのか。具体的な数字忘れてしまったんですけども15年以内に5・6校に1校はなくなるということがはっきりしているんですよ。市立千原台の伝統、千原台の高校を市立としてしっかりと大事にしていきたいと考えると、ここで本当に生徒たちが来たい学校にしたい。そのために何ができるかということと一緒に考える必要があると思いますので、その辺りの問題意識とビジョンと共有しながら何ができるかっていうところをもう一回一緒に考えていきたいと今はお話を聞かせていただいているところです。

(教育長)一番最初にスタートした時の議論が一番大事だったのは、まず高校2校と専門学校1校という体制が維持できるのかというご意見だったんですが。それを1年かけて議論して、こういうことであれば高校2校残せるね、高校・専門学校体制でいけるねというのを決めたのが最初の1年間で。その上で高校が考えなければいけないのはどうやったら倍率が維持できるか、定員割れしないということですよ。そういうことがあって、またそれがまあ先ほどもありましたけど、継続的に定員が割れてしまうようだったら本当にもう学校いるのというふうになりかねない。一番大事なのはそこをなんですよ。そういう意味で私たち教育委員会、教育委員のメンバーが率直にいて教科とか人数とかクラスとかそこに何かこだわりとか持っているわけでは無いですし、そういう議論を別にここで今までしてきたわけじゃない。クラスを1クラス何人がいいですかとかコースをどうしますかということをここで決めてきたわけじゃない。そこについてはむしろ学校の現状を踏まえて今後も人気がある、維持できればそれが1番大事なこと。校長提案で今後もその倍率が維持できて学校が存続できるということであればそれはそれでいいと思います。人数増やしてくれ、教員を増やしてくれというのも学校改革のためにどうしても必要なことだということであれば、それは教員を増やすことによって我々が、もちろん市役所全体の予算の話ですからね、教育委員会の力だけでできませんけど、当然それは大事な課題なんで、優先的に増やしてくれって言うことは可能だと思いますね。だから、むしろどうやったら一番、今後とも人気を維持できるのかというのを、お話を聞きたい。具体的な。それで現実問題で可能だねということであれば、いい

と思います。そのために今日はあんまり時間が取れない。これは別に私たちが短くしてくれ
といったわけではない。むしろもう少し時間が欲しい位ですけど。じゃあどうしたらいいの
というところを聞かなきゃいけないけれど。先ほど西村先生がおっしゃっていたご意見も、
一つは私たちとしては学校のまとまった意見として聞かないと、一人ひとりの直接にいろん
なことを言われても、じゃあどうするのっていうことになるので、最終的には校長の意見な
んですよ。校長を通じて学校の1つの声として学校としてはこうしてほしい。それができる
ならやりましょうということで。ある程度まとまったものとして。

(校長)はい。今度、学校としてそこは取りまとめていきたいと思います。先ほど西村が申しました
ように、先日の職員会議の時に私が提案してその場で意見を求めました。その後、面談をし
ながら個人の意見を一応今日までに全職員。今の国際経済コースを1つそのまま残したほう
がいいんじゃないかというのは、私は初めて聞きました。ただ、そこについてはまずその前
に全部の職員から、一人一人と1対1で聞いたときには、やはりこの案に対して賛成の方が
圧倒的に多かったです。私が個人的に聞いたときにはですね。やはり職員会議の場で発言で
きる職員というのは限られている。そうするとサイレントマジョリティみたいなものができ
てしまうというのもあるので、私としては個人面談で一人一人から聞き取ったつもりです。
そうすると今の傾向ではそうなったというのが現時点でのご報告。これは校長案として。改
革案として出す出さないは置いておいて。そしてもう一つは、今日は個人的な意見をいつて
もいいよということでそれぞれの意見が出ているんですけども、私も校長としての学校の案
ではなく個人的な意見でいうと、先ほど国際経済コースがという話がありましたけど、この
数年国際経済コースずっと定員割れが起きています。毎年毎年、二次募集。職員みんなで努
力してようやく今年埋まりそうだったけども最終的に1人埋まらずに今年も二次募集。やっ
と私4年ぶりに二次募集が埋まって何とか定員になりそうという苦しい状況だったのです
ね。この状況の中でそれをどう変えていくかということが1つのスタート、うちの学校に
とってはスタートでもある。それと60人確保できるか。今年57人来ました。私は確保で
きるというふうに思っています。その理由はですね、今、強化部を中心に健康スポーツコー
スに入ってきていますけども、その他のスポーツをやりたい生徒たちもまだまだいるように
思っていますので、そういったところをしっかりと開拓していった条件を整備し、立派なトレ
ーニングルームもあります。それから校舎を改築してグラウンドを広くするという案もあり
ます。そしてしっかりと指導者を置きます。そういったことをしっかりとアピールしていけ
ば充分60人の定員を私はみたせるそういったことをやってくれる職員が揃っているとい
ふように個人的には考えております。

(同窓会会長)いいですか。まず同窓会としてはですね、学校残していただきたいというのは第一番目
の不安ですね。やっぱり定員というのも、ある程度先だってから聞いてました160人でい
うの聞いてましたので、それだけしか聞いていなかったんですよね。学校改革の内容の事は
ほとんど聞いてません。改革というからですね改善じゃないものだから、おそらく教育委員
会さんが現状をまず否定した観点から新しいものを出して、それを押さえつけてやるのかな
と思ったら、そうでもなくある程度の事は聞いてもらえる。ただ学校の先生方と校長先生の
意見がちよっとすれ違っている部分がちよっと寂しかったです。それと私も教育委員会の方
はある程度現場のこともやっていたのかな思ったら先ほど、教育長おっしゃったように全体
的な流れの中で今後の10年20年の先を見ながら学校をどういう風にして残していくかと

いう観点で考えられているなら、その話は少し違ったのかもかもしれません。ただ同窓会としてやるのには今後のいろいろな改革をやられる中で現場の先生方が混乱するようなことだけは絶対やってほしくない、それと中学生が来るわけですけど、中学生の生徒さんと保護者の方はこの学校は校風とか特徴性そういったもので選択されてくるでしょうし、最終的には出口のところ、例えば今回も聞きましたら経営情報コースの人たちが3分の1が大体就職されて、3分の1が大学、3分の1が専門学校というようなことで、そういう選択肢、保護者の方なんかもやっぱり出口ですよ、それがうまくいくかどうかですよ。例えばスポーツ科ができたとして2クラスしたときに、そういう人たちがちゃんと出口があるのか、出口でちゃんと大学にいったりとか。先ほど聞いたら大学に半数以上とおっしゃったかなと、就職の方が数人おられる。で後専門学校へ。そういう流れがないとですねこの学校がまず選んでいただけませんよね。そのこのところをきちっとやってほしいというのと、現場の先生方が混乱しないようにという事だけはお願いしておきます。それと実は校長先生からありましたけどPTAの小田PTA会長が電話してこられましたけど、自分の中では、ほぼ決まっているよだから子供たちが楽しくやっていけるようなことで確認くださいねというのが一点と、国際経済コースがなくなるのが非常に残念だと。しかし、さっきおっしゃったように定員割れが続いていると、これからのグローバル社会の中で生きていこうとするならやっぱり残していったほうがいいんじゃないかなとか。あるいは熊本が観光都市で押してやっていこうとするのであれば英語はね。英語が苦手で中々来られないという話も聞いてますけど。そういったものは今後どうしても身に付けていかなければならないものじゃないかなと思います。現場のことがわからないもんですからその程度のことしか。

(教育長)ありがとうございます。私たちとして一番大事なのはどうやって人気がある学校をどうやって作るかそれが最大の目的ですし、そのための案を考えてきたわけですが、その中でなかなか定員が、定員割れが続いている状態をなんとかしたいと、しなきゃいけないというところなのかなと。一方で、今おっしゃった、さっき生徒と意見交換会をやった中で、そこで生徒さんから出てきた課題としては授業を真面目に聞いている生徒が少ない。授業中に居眠りしないということが課題だということで、理想としてどういう方向性に向かうのかクラスをどうするのかということもあるんですけど、子供たちが生き生きと学べる授業というか、学校、楽しく学べる学校、それを作っていくためにはもしかしたら今議論しているような人数とかという事だけではなくて、普段の授業のあり方とか、そういうところを見直していくことの方が大事なのかなというふうにも。前半の意見交換会で生徒さんすごくしっかりしているんですよ、自分の意見はとてもしっかりしっかとおっしゃるし、活発な意見交換もできました。この良さをもっと生かせるような授業、学校の活動ができていればとても魅力的な学校になるんじゃないかなと思います。そういう方法を学科の形式の議論と合わせて、それだけじゃなくて日ごろの授業をどうやったら活性化できるかということも大事なのかなと思いました。

(西山委員)私も今の教育長の意見に賛成で、今日はそういう議論ができるかなと思ったんですけど。現場の先生方の意見を伺っていると、それ以前に改革の方向性がはっきりしていないと非常に不安に思っておられる。大丈夫かなあと思っておられる。ここはやはり打開しないと先ほど教育長がいわれた、授業の質の向上の議論には入っていけないだろうと、そういう印象受けました。ですから国際経済コースを残してほしいというのは生徒さんからも意見

が出ました。ただ定員割れしているという状況がある。ですからそれだったら国際経済コースの内容の良いところを他のコースの中に残していくことも必要だと思うんです。まずは形が決まらないとどうしようもない話なので、それについては校長先生と先生方で充分議論していただいて最終的な学校案を提示していただくということも大事ではないかなという印象を受けました。その上で改めて授業の質の向上についてはお話をできたらなというふうに私は思いました。

(校長)私も全く同感でして、授業の質の向上というところと、改革後の授業をどのように行っていくのかというところが職員の中にしっかり見えていかないと、その不安もあるというふうに思います。なので今年度は研修を是非、探究的学習とかの研修を増やしてくれということで事務局にお願いして、千原台と必由館にさせていただきましたけど、来年度はですね、やはりこういうのはやはり全て兼でやってもなかなか変わっていかないので学校の中に魅力づくり部というのを1つ作ってそこが主導して自分たちが実際探究の時間を理解して、生徒たちについても探究の時間が足りないといっていましたので、そういったものを作っていくときにどういった方向性でやっていくのかというところを魅力づくり部を中心に見える様に、多くの職員に見えるように自分たちの研修をしっかりやっていく、組織と時間を作っていくたいというふうに今考えています。

(同窓会会長)このような状況の中で、来年からという形でできるんですか。まだまだ何か議論し合うところがたくさんあるような気がします。

(教育長)今、固まっているところと、これから変えていくところもう少し、どこがいいのかも詰めないといけないのかという。何から進めていくのか。何ともいえない。

(嘉古田)話を聞かせていただいて西村先生からもあったんですけど、今回ですねコミュニケーション不足というところがもう認めていただいて、お互いにですね。そこで先ほどもいっていただいたんですけど膝を突き合わせてもう一回話し合っていこうといっていたじゃないですか。本当にいっていただいてありがたいなと思ったんです。先ほど教育長からもいっていただいたんですけども現実問題これでいいとなった場合はそれで進めていきますよという事だったんですけど、もしそういう風にならなかった場合、例えば先ほども出ましたけど僕らがいやこれじゃあもうちょっとやるのは難しいですとか、教育委員会的にもこれではできないですというふうにお互いがなった場合には先ほど戸田会長からもいっていただいたんですけど、一年間でもやっぱり始めるのを遅らせていただきたいなと思います。そうしないとお互いが納得いってないまま無理矢理、まあ予算の関係とかもあると思うんですけど、でもやっぱり子供に影響が出ますので一番、なのでそこは是非ですね頭が痛いところだと思うんですがよろしくお願いします。あともう一点が本校の先生方は先ほど生徒の意見も聞かせていただいたんですけども、本当に毎日いろんな授業とかでも試行錯誤とか工夫されて授業されます。なので是非一度といわず授業の方に足を運んでいただいて直接その授業風景を見ていただいた中でまたいろんなご意見をいただきたいと思います。すいませんがよろしく申し上げます。以上です。

(教育長)今おっしゃった、教育委員会としてどうしてもこの、こうじゃなきゃいけないという、カリキュラムに関してですよ、思ってるものではないので、むしろ学校がこうだということをお願いいただければ、それが実現可能だったら、それでいいかなと思います。そんなにそこは私たちが無理だからという事はあまりなくて、どうなってるのかという、校長の案でも皆さ

んの中の案でも、こうしたいうのを出していただいて、今の倍、金かかるとなると厳しいかも知れませんが、そういう事じゃないとは思いますが、そんなになんでしょうね、ずれているってそんなにないんじゃないかなというふうには思います。

(小屋松委員)冒頭にもいいましたが、学校改革という時に千原台としてはどういう改革案か。その基本には強みをしっかり活かしていくとか長所を伸ばしていくこれしかないと思うんですね。じゃあその長所って何なんだろうということ。一つは伝統。商業高校としての伝統。これはやっぱり大きいと思いますし、OBの方々もたくさんいらっしゃる。これらを活用してやる事は非常に大事な事じゃないかなと思いますね。そしてもう一つは市立高校の先生ってのは異動が少ないんですね。この市立高校にずっといられるという事ですので先生が安定しているということで授業の研究ですとか指導等もできるわけです。これもまた一つの強みかなと市立高校の先生にとっても学校にとっても。この2つを何とかこうブラッシュアップしていくこと、それによって千原台にいきいたいという生徒に来てもらう。そういう学校になって欲しいなというふうには思っています。非常に漠然としていますが 感想としてはそういうふうには思っています。

(学校改革推進課長)学校改革推進課課長の松永です。コミュニケーション不足のところでは我々も反省をしております。もっと話し合いが重ねられたのではという思いがあります。最近は毎回教職員会議に参加させていただいております。また、各科の部会の方にも参加させていただくというような形で議論を重ねておまして、以前、同窓会の方に入っていたいただいた意見交換会において出された課題というのはかなり解消されつつあるという実感を持っております。その上で、南校長先生がご提案された案というのは、そこで出た課題を解決する一つの方策であるというのは間違いないという受け止めをしております。例えば、健康スポーツ探究科だけ改革後も40人学級ということで、改革の大きな理念として少人数学級による探究的な学びを深める等ということをお願いしつつ、健康スポーツ探究科においては、そこができていなかったという、プランニング上の課題もあった。それを南校長案では解決もできるということで、非常にこの検討というのは大事だと思っております。今後も是非議論を重ねさせていただいて課題を解決していきたいと思っております。そして、今出させていただいている課題というのは、どれも正直なところでいいますと解決できない課題ではないのではというふうに感じています。大変、厳しいご提示をいただいている部分もございしますが、我々も先ほどおっしゃられた入試の改善の部分を含めて、今具体的にプランニングをしておりますし、そういったことの一つ一つの積み重ねで新しい学校像がお示しできるのではないかと考えているところです。

(教育長)今課長からもありましたが、具体的なカリキュラムとかに教員配置の問題とか、あるいは、定員の問題とか実際どうするかというところの議論を進めていくしかない。教育委員会に関しては、もっとお金が欲しいとかもっと人が欲しいという事はいただければ、それは私たちが一生懸命やりますから。一方で、じゃあこの教科を何時間にしますかとか、人数をどうしますかという事は、私たちは正直いうとそこは事務局と一緒に議論してもらったら、納得する案ができればそれで良いと思いますよ。上席が納得しないということが、もしその話があったとしたらそれは多分それはそうじゃなくて、私たちがこの人数じゃだめですよ、この教科だめですよといった事はないし、いうつもりもない。そういう経過がこれま

であるあったんだしたら、そこはこれから心配する事は無い。何でもいっていただければいいんじゃないかなと思います。

(苦野委員)一つ意見とお尋ねさせていただきたいんですけど、教育長がおっしゃったように私も委員長をさせていただいたときのスタンス、それからその後、教育委員会会議のスタンスを上手に伝わらない、伝えることができなかつたんだなということをととも今反省しているんですけども。そのスタンスというのは教育委員会がどーんと何か打ち上げて現場にどんと下ろして、はいこれ絶対従ってくださいみたいな。そんなつもりはもともと全くなかつたですよ。でもそのようにとられてしまったとしたら、これは私たちの反省しないといけないところだと思うわけです。スタンスは教育委員会は現場を支援する。ただしそのためには大きなビジョンを出す必要があるの、それはこれも教育委員会が勝手にやったわけではなく改革検討委員会が勝手にやったのではなく、多くの人の意見を聞きながらそれを総花的であったかもしれません、具体的なところは。でも大きなビジョンとしては皆で合意できたですよ。そういったところをしっかりと掲げて、さあそのために現場でどういうことができるだろうか一緒に考えましょうというスタンスだったんです、ずっと。それが十分に伝えられなかつたのは大変申し訳なかつたなと思つているところです。もう一方で私も教育学者なものですからたくさんの学校の学校改革に関わらせていただけてるんですが、うまくいく学校、あるいは良い学校は例外なく対話の文化をしっかりとできてるんですよ。良くない学校は例外なく対話がないです。これから必要なのは今どれぐらい、お尋ねしたいと思つたのは先生方が先ほどおっしゃってましたけど、膝を突き合わせてどんな学校を作りたいのかそのために自分たちにどんなことができるのかとか、生徒たちにどんなふうになってもらいたんだろうとか、そういった一番根っこのところですよ、対話を本当にぎっくばらん安心してできる場でそういう対話をどれくらいされているかどうか。そのビジョンの共有、最上位目標の合意ができれば、じゃあつまりですね対話の順番で、例えばカリキュラムがどうか、今部活がどうか細かいところからやっちゃうと、もう何もできなくなつてしまいますよね。これもあるから問題、これもあるから問題となつてしまいますけど、一番最上位はどこなんだと、でそのために今の現実的制約から考えて何ができるんだろうということをもまず大きなところを共有していく、先生がビジョンがまだ提示されていないという事はそういうことだと思うんですよ。その対話が今どれくらいあつているのかということをお聞きしたくて。今、魅力部というのもおっしゃつたんですけども、例えばその魅力部だけがやっちゃうとやっぱりそこで温度差ができると思うんですよ。多分、全教員で何をいっても良い、安心できる場でのコミュニケーションの場がきつと必要なんじゃないかなと思うんですよ。そういう場が今どのくらいあるのかという事と、これからどれくらいビジョンがあるかということをお聞きしたいと思つています。意見とご質問をさせていただきました。

(校長)正直いってこの高校改革について膝を突き合わせて苦野委員がおっしゃつたようなリラックスした場で語り合つてというのは今まで不足していたと私自身も反省しています。ですので、もちろん魅力づくり部だけがするのではなく魅力づくり部が主導しながらそういった校内の研修とかをしっかりとやっていくということが必要だということを感じたので、魅力づくりを作つたというのが私の意図ですけども、私の感じていることです。それを増やしていこうとは今しているところではあります。

(教育長)今の案を作る時も学校の先生方が入つて案を作つてきていますよね。いかがですか。

(学校改革推進課長)ワークショップを行っています。また、昨年4月から各部会に入らせていただき議論しています。細かい話をしますと、ある程度議論を整理しながら、後戻りがないように合意を重ねながら議論をしてきたつもりではあったということです。課題を一つ一つクリアして教育委員会会議でもその時点でのカリキュラム等をお示しさせていただきましたが、それを出す前には学校側にもご了承をいただきながら進めたということではございました。

(教育長)それはなぜ皆さんで議論されていないのかな。

(西 村)合意しながらという事なんですけど、結局、ここは譲れません、ご理解くださいという説明があった。それを合意といわれれば合意かもしれませんが、ご理解くださいを何度も繰り返されると、こちらは黙ってしまいますよね。そういうことです。だからここにきてでっかいひっくり返しがあったりとかいうのがある。

(嘉古田)最初に体育主任として教育委員会から2名こられて管理職にも入っていただいた意見の中で僕も一番最初にその一番ほんと最初のほうに普通科じゃダメなんですか、僕は普通科でお願いしますとずっといってたんですけど何も通らなかったです。結局きたのが普通科じゃない案で来たのでどうしようも。意見はあったんですけどそこはどうしようもありませんでした。朝会の時一番最初の時朝礼の時に来ていただいて15分位で説明していただいても、僕らは意見もいえないし、もう時間がないので、生徒が待ってるのでその後ホームルームで、それで、これですといわれて終わりでした。

(教育長)先生方が入ったチームで議論して案を作ったのではないですか。事務局と先生が入った。

(学校改革推進課長)今ご説明されたのは、改革の方向性をまず全体会の場でお話をしました。後は部会の中で個別に議論をしてきました。

(教育長)その部会には学校の人も事務局も両方入ってたんですか。

(校 長)具体的には教務主任と進路部長がその会議に入って、私の解釈としてそこであったことを、例えばチームズで見といてくださいとか、こんな方向でいきますとか示してたつもりなんですけど、やはりそれを膝を詰めて先生方としっかり話し合う機会を作れていなかったという反省したので、その手法ではやはり伝わっていないようだったので、前回からは商業科会や体育科会に事務局に来ていただいて、そこに我々も入って一緒に話をしたり、全職員でこの話を月一回話す、検討委員会の後に必ずその報告会という形で全職員に職員会議、そこで事務局も来ていただいて話をしてもらって、職員が持っている個人の見解を事務局も一緒に聞く、というのを始めたのが今3回目ですかねというところで、そこは私も遅かったという反省はあります。

(教育長)どんなふうにしたら皆さんが納得して進められるんでしょうかね。

(西 村)先ほどいわれた最上位目標なんですよ。私も最初にスクールミッションを決めてそれに照らして他のをどんどん考えていけば順調に決まっていくのではないかな。なぜ最初にスクールミッションじゃないのかというのを聞いたんです。そうしたら、いや最初からスクールミッションを作るのではなくて教育課程とかそういうのを作っていくうちにだんだんそういうものが見えてくるだろうというのが事務局の答弁です。そんな事はないだろう。今いわれたようにそういうのががちがち決めていってもその後の議論ができなくなるんですよ。まず最初大きなこんな学校にしようというのがみんなが合意できて、もしそういう学校にすると教育課程はどうなるかコース設定はどうかそういう風になっていくと思うんですよ。だからまず最上位目標の合意があってそれからじゃないのかな。

- (教育長) どういう体制でそれをしたらいいのか。誰がどういう議論をしてそれを決めていくのかという事なんですけど。
- (苫野委員) 私が申し上げるのは差し出がましいことかもしれないんですが、やっぱり先生方全員で今回出た答申の理念とか方針とか確認して、これだったら合意できる。で、じゃあこれを千原台ではどういう風に実現できるんだろうっていうのを、とりあえず一番底のところの先生方の思いをまずは交換してみたらどうでしょう。出てきた案に対して何かいうだと、結構すれ違いが多いと思うんですよね。でも、一番底の思いをお互いに交換していくと、意外にこういうところが共有できるなというところが必ず見つかると思うんですよ。そういうやり方で、まずは先生方みんな全員といってもそれこそ4人組とか5人組とかでまずやって、で、グループを入れ替えながらやっていく中で、お互いの思いを共有できると思うんですよね。まずそういうところからやって、ここまでは合意できたねというプロセスがないと自分の思いがないがしろにされたという思いが必ず、それはもう私も、大学でいつもかいくぐってきている、全くそこは同じなので。思いを言わせてほしいと思っている。そういう場面が一番最初に必要なんじゃないかなと思うんですよ。
- (同窓会傍聴者) 外野からいいですか。
- (教育長) どうぞ。
- (同窓会傍聴者) 今お話をお聞きしていて、また再度、話合おうかということですか。
- (苫野委員) そうですね。大きなビジョン等が出てますので、これについて話し合っってしっかり思いを確認するという事はやったほうがいい。もう一方で先程申し上げたように全国の高校が年間何十となくなっていくてるんですよね。そういう意味でいうとある程度タイムリミットはあると思うんです。そういったこともにらみ合いながらほんとに魅力的な市立高校を残したいというのが私たちの思いですから、残すためにどんなふうに魅力化できるだろうかということ、みんなが出し合った自分の思いが大事にされているということを理解できる形で対話を通して、まあ、なので場合によってはもう少し後倒しになるということはあるだろうと思います。拙速は良くないと思います。なので丁寧な対話が必要なのではないかなというのが私の意見ではあります。
- (同窓会傍聴者) 今の教育長のお考えのスケジュールはどのようなものなんでしょうか。
- (教育長) 今のスケジュールはこれまでお示していたスケジュールなので5年からということで、それが可能なのかということをもう一回見極めるということです。
- (同窓会傍聴者) 先生方のお話を聞くと先生方との考え方の違い、そこあたりが当初からあったように今もあるように。来年度4月からということでお考えという、これを溝を近めていくためにはまだ相当に時間がかかる。そんなに急がなくていいですよ。必由館高校もやってるんでしょう。ですから必由館高校と一緒にスタートするようなお考えでもっと一番最初に戻って、さっき先生がおっしゃられたようによく意思疎通をしてから問題を解決して、学校改革を進めていただくようお願いしたいなというふうに私は思います。私同窓会の井と申します
- (教育長) 必由館高校と大きく違う点は、必由館高校はもう少し前の段階であと1年延ばしてほしいということで1年遅らせて進めてきてるんですけど。千原台高校の場合はそのスケジュールでいいですよという前提で、今もう議会にも提出しているんですよね。だからそういう意味では今から1年伸ばすということになると非常に必由館高校よりも難しいわけですけどね。それが現実問題としてはあるかなという風に思います。

(同窓会傍聴者)ただですね先生方も私どもも内容が見えてきたのは昨年の11月なんですよ。それからいろんな意見が出てきて今日に至っているんだろう。それまでが見えてきてないんです。

(教育長)そこはどうなんですかね。何度かこれまで教育委員会で議論してきたし、学校とも議論してきたので。

(同窓会傍聴者)インターネットで公開されたホームページに公開されたのは11月頃じゃないですか。

(学校改革推進課長)教育委員会会議で議論したのは8月です。その後9月の議会で議論をしています。その時にはもうある程度の形ができています。

(教育長)教育委員会会議では議論をして、議会にも示して話をしてきたのは確かなんです。だから非常に率直にいうと議会にもこういう日程で内容でということをもっと前から話をしてきましたので。

(同窓会傍聴者)議会はどのようにでもなりますよ。

(教育長)市民の代表なので、それは私たちとしては一番大事にしていかなければいけないところかなと思っています。

(同窓会傍聴者)いやあの私の聞いた話ですが議会ではほとんど来年度の4月からスタートするというふうになってますよね。今日のこの会議聞きますと来年からスタートはできないんじゃないんですか。まだ学校との話し合いが決まってないじゃないですか。

(教育長)決まってないとは思いませんけど。

(同窓会傍聴者)今日の話、聞いてみると全然、理念とか基本方針とかそういうのが何かバラバラでそういう状態で来年の4月からスタートはできないんじゃないんですか。ですから議会ですすね、もう少し1年間遅らせてもらうというような発言を教育長の方からされて1年間もう少し議論をして、そして進めるというふうにやってもらいたいと。

(教育長)先程もいいましたけど、何にも決まっていないわけではないです。

(同窓会傍聴者)すいません、ほぼ決まってるんでしょうけど、一番大事なところが決まっていないじゃないですか。それがいいたいんですよ。それがその来年の4月までに基本方針、理念というのがちゃんと決まっていくということであればもう何もいいませんけど、とても今日の会議ではそれは無理じゃないかなというふうに感じました。

(教育長)そこをもう少し見極めさせてほしいというのが私の意見ですけど。今日ここでじゃあ1年伸ばしましょうというのはそれはそれでどうかと。何が決まってて何が決まってないのかっていうのも少し確認させて欲しいなと思います。

(同窓会傍聴者)ぜひよろしくお願いします。

(教育長)決まってないところがどのくらいかけたら決まっていくのかですね。分りました。他にご意見ありませんか。

(校長)先ほどの繰り返しになるかもしれませんが、苫野委員がおっしゃられたように職員が5人くらいの少ない人数で、本音のところで改革に向けての理念を話し合う場をしっかりと作っていきます。それをもとにしてどういう風な未来づくりをしていくのかを、先生方と話をしっかりとしていきたいと思っています。

(教育長)どのぐらいの時間が、まとまるまでに必要なのか校長と相談しながらいきたいと思います。

いいですか。事務局もいいですか。だいが予定の時間より1時間ほど伸びましたが、話が今日はちゃんとできてよかったなと思っています。